

チェンマイ大学での貢献 (92)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

ミネソタ州ミネアポリスで黒人男性が白人警察官によって逮捕されるときに、首の部分を膝で押さえ込まれ、息ができずに窒息死したと言う。この状況が動画で流れるや、すぐさま黒人に対する「人種差別」との抗議が、瞬く間に全米35州以上に広がった。黒人に対する差別問題 (Racism) は米国の抱える大きな問題の一つであり歴史的な経緯を踏まえても、他のイスパニック (Hispanic) や有色 (Colored) 人種などに対しても、差こそあれ存在した。第2次大戦中に敵国日本からの移民と言うことで、日系アメリカ人が収容所に入れられたこともその大きな例の一つであったが、いまではそれなりの謝罪と補償が国家としてなされ、解決を見ている。本報では米国における黒人差別について歴史的な見聞からその変遷を見ることにする。なぜこの話題を取り上げるかという、国際交流事業においても、単に学術的研究論文発表をするのがシンポジウムやワークショップではないからである。異なる国からの参加者がイベントに掲げた話題や問題について研究論文発表をするのみならず、国際化の推進をするという重要な要素が入っているからである。自分の研究発表が済むと、そそくさと市内観光に出かけたりする教職員もかつてはあったが、今やホスト大学が準備、オファー (Offer) するプログラムに沿って参加する形に多くの事業がなされた。それでも何処まで国際化 (Internatioalization) が進んでいるかという、その辺は疑わしい。国により文化や伝統、慣習も異なるし、理解の方法も異なる。だからこそ一堂に会し、共通のテーマについて学術的研究論文を発表してその解決法を探すと言うのが主たる趣旨である。しかし異なる文化的背景を有する国の参加者であるからこそ、文化や伝統、慣習、宗教などを尊重した上で、国際的の礼儀作法やエチケット、マナーを共有する事で友好と相互理解を進めるのがもう一つの趣旨である。なぜ開会式 (Opening ceremony) や歓迎パーティー (Welcome party)、見学会 (Field trip) やフェアウェル・パーティー (Farewell party)、閉会式 (Closing ceremony) があるのか、またそれぞれのイベントにはそれなりのドレス・コード (Dress code) が指定されているのか、そうした事を参加学生に指導すること無く引率して来るから、時々はずかしい思いをしなければ成らない。国際セミナーや、シンポジウムにおいても、論文の発表のみならず、そうした予備知識を事前に施しておかないから一向に発展しない。かつての参加者からの報告会や報告書をウェブやホームページにアップロード (Upload) してないから、大学が金を出してくれるのであれば参加すると言うレベルの低いモチベーション (Motivation) で応募参加するから、考えて居る視座が全く外れている。日本が大東和戦争 (第2次世界大戦) に参戦する前までは世界で植民地になって居なかった国はわずかの2国、日本とタイ王国のみであり、アジア、アフリカは欧米、特に欧州列強国によるアフリカ分割がなされていた。大戦中も日本

は国家の独立と人種の平等を機会ある度に提案したが、欧米列強の反対に遭い、そのハードルは高かった。議決においても多数決では無く、参加国（者）全員一致の決議で無ければ認められない等という理由で賛成多数であるにも拘わらず、決議には至らなかった。それでもそのような議論があったことを記録に残せと詰めより議事録には残ったと言ういきさつもある。過去の経験、体験を回顧し、大学間国際交流事業が持つ意味の重要性をあらためて考える機会としたい。

筆者は1964年に幸運にも米国を50日ほど訪れ、見聞する機会を得た。愛知県の名古屋市に位置するテレビ放送会社（Broadcasting Network）が、地元で得ている利益のいくらかを地域社会に還元することで貢献すると共に、日頃の自社への協力、支援に謝意を表したいとの意向で東海地方の3県（愛知、岐阜、三重）の大学、大学院、高専など教育研究機関に在籍する学生を、毎年10人程度米国の大学に派遣するというプログラムを立ち上げた。1ドルが360円の時代であり、持ち出し外貨にも制限があり一人あたり500ドルが上限であったと記憶する。海外旅行保険から航空運賃、滞在費などを含め、一人約100万円ほどが必要支給額だったと想われる。参加学生が準備する者は、自らが身につけるフォーマル（Formal）とカジュアル（casual）なスーツ（Suits）や衣類、それに旅行鞆（Suitcase）で、たしか小遣い（Pocket money）まで頂いたかに記憶する。幸にも筆者はそのプログラムの第2回の派遣グループの一員として貴重な経験を得る機会を頂いた。この事業の主たる内容は、相手受け入れ大学であるユタ大学（University of Utah, Salt Lake City）での3週間の滞在と後半4週間の米国各地訪問とすることで、相手大学が用意したステーション・ワゴン（Station wagon）2台でユタ大学からワイオミング（Wyoming）、ネブラスカ（Nebraska）、アイオワ（Iowa）、シカゴ（Chicago）、ニューヨーク（New York）、ワシントン（Washington D.C.）、ピッツバーグ（Pittsburg）、アラバマ（Alabama）、ミシシッピ（Mississippi）、コロラド（Colorado）とまわり、再度ユタ大学に戻ると言う、2度と得られない貴重な経験をさせて貰った。ユタ大学では滞在中に相手大学が用意する各種プログラムへの参加が主たる日課であった。そのプログラムの特別セミナーの一つに黒人問題があった。筆者は当時大学4年生で、1964年はわが国にとっても、記憶から消しがたい記念すべき年でもあった。すなわち東京オリンピック（Tokyo Olympic）の開催、名神高速道路の完成、新幹線開通と第2次大戦後20年そこそこの日本が、大きな発展を成し遂げたことを、世界に誇って提示するメモリアルな年（Memorial year）でもあった。前年の1963年11月には米国の偉大なケネディ大統領（John Fitzgerald Kennedy, US President）がテキサス州ダラスで凶弾に倒れ、衛星放送の第一報がこの悲報であった。そして筆者自身が、凶弾に倒れたケネディ大統領が眠るアーリントン（Arlington Cemetery）墓地を訪れることができるなどは夢にも思わなかった。ミシガン州デトロイト（Detroit, Michigan）にあるグリーン・フィールズ博物館（Greenfields Museum）は発明王のエジソン（Thomas Edison）と自動車王ヘンリー・フォード（Henry Ford）の偉業を称え、歴史的な産・工業製品を展示した記念館であるが、そこで見た日本の技術はイギリスのマン島で1

位から5位までを独占するという圧倒的な強さで偉業を成し遂げたホンダのバイクと新幹線の台車（車輪の部分のみのカットモデル）の一部が展示されていた。昔の単葉機、複葉機を含む飛行機から蒸気機関車、鉄車輪装備のトラクタなど大型機械の屋内展示もあり、極めて広く、全てを見て回るには1日ほどかかる。筆者は1975年にもこの博物館を訪れる機会を得たが、その時はミシガン州立大学の知り合いの教授の次男がフォード社に勤務していたので、朝早くにホテルに迎えに来て貰い、博物館まで送って貰い、1日を過ごして夕刻に再度ピックアップ (Pick up) に来て貰った記憶がある。さらに母校三重大学の学生20数名を引率して2回ほどミシガン州立大学の夏期英語研修に出向いたときにも、この博物館訪問はプログラムに組み込まれていた。

少々余談になるが、上記のように、筆者はミシガン州立大学がオファーした上記夏期英語研修プログラムに2度ほど参加した経緯がある。最初は副引率者として、もう1回は代表引率者としての参加である。2回目の参加では、旧知の知人にお世話になった事を記憶している。本NPO事業にも、その後賛助会員として協力して頂いたT氏がその人である。残念ながら3年ほど前に逝去され悲しみに堪えない。冥福をお祈りしたい。当時T氏はミシガン州立大学の博士課程に在籍し、学位取得を目指しておられた。たまたま連絡もできなかったので事前連絡無しで引率者としての参加となった。時たまT氏はキャンパス内で筆者の姿を目撃し、ひょっとしてと考えることもあったが、まさか日本に居るはずの筆者がミシガン州立大学にいるなどは予測もできず、そのまま双方共に知らぬ間であったが、後日筆者がミシガン州立大学の農業工学科でセミナーを行うアナウンスが大学側から成され、T氏は「やはりそうだったのか」と思い直し、それ以後双方共に連絡ができる状態となった。筆者のセミナーにも参加して貰い、プログラム終了までの滞在中は飲み屋にも連れて行って頂いた。謙虚で誠実なT氏は帰国し、しばし日本の国際関係の機関で勤務した後に、日本の大学の教授として迎えられ、以前にも増して活発に活動されていたが、当NPO (IFPaT) にも常識有るスタンスで、会員となるのではなく、賛助会員としての身分で在籍されていたが、病魔により突然急逝されてしまった。亡くなる約1週間ほど前まで電話で直接話をしていただけに、悔しさとともに残念で成らない。惜しい人を亡くしたとの思いは今でも心に残っている。ひたすら冥福を祈る毎日である。ミシガン州立大学との関係は筆者が属した三重大学の農業機械学科 (Department of Agricultural Machinery) とMSU (Michigan State University) の農業工学科との学科レベルでの交流 (Faculty level Exchange program) があったので、国際学会などへの参加やここで紹介した夏期英語研修 (English Summer Program) では、参加学生は毎日午前中は英語の授業があって、出席する必要があるが、引率教員は手持ち無沙汰である。筆者はその時間を利用して農業工学科 (Agricultural Engineering Department) を訪れ、特別セミナーとして話題提供したり、あるいは大学の上級事務官 (Provost, Senior Administrative Officer) を事務棟に訪ね、米国における教員の人事、雇用における評価 (Evaluation)、採用システム (Hiring system)

について情報を得るなどに時間を割いた。こうしたことは余談であるが、有益な参考資料として帰国後報告書に記した。夏期英語研修の参加学生の引率者 (Escort) は引率が主たる任務ではあるが、積極的にセミナーで話題提供したり、有益と思われる情報入手に尽力する事が必要と今でも考えている。単に学生を引率して相手大学を訪問し、用意されたプログラムに参加して帰国するだけでは余り意味がない。なぜならそうしたプログラムなら何処の大学でも同じように実施して居るからであり、オリジナリティ (Originality) が見当たらないし、特にその大学で無ければならない理由がないからである。

さて民間TV放送局による海外派遣プログラムでは、最初の3週間はユタ大学で用意された特別の話題についての講義や、若干自由に自分が好む講義にも参加しても良いと言う事で、いくつかの講義に参加し、聴講した。時には教室に行き、担当の先生に「日本の大学から来た学生だが、これこれの事情で許可を得ているので、先生の講義に参加、聴講させて欲しい」と申し出て許可を得、参加する事になったが、ちょうどその日はテストをするという日になっていた。しかし、今更「それでは失礼する」と言うわけには行かない。どんなテストかと不安と興味が入り交じった気持ちで席に着いた。しかし講義の名前は算数演習 (Arithmetic drills) というもので、配布された問題を見て仰天した。小数点の掛け算や分数の四則演算で、ものの15分もすれば、全問回答できる内容であった。しかし速く終わってもその後どうして良いやらわからないので、しばし席に着席したまま様子を見るべく居残り、周りの米国学生達の様子を静観していた。そのうち回答を終えた学生達が一人、また一人と答案用紙を担当の先生の元に持参して部屋を出て行くのを見て、自分もそうすれば良いのかと思って部屋の外に出た。後から出てきた女子学生に「どうだった?」と尋ねると「まあ、まあできた」という返事であった。大学で小中学レベルの算数も教えているのかと大変驚きであったが、後で聴いてみると授業のタイトルからして「算数演習」だからそれもそうかと頷いた。また別の機会に工学部の授業に出てみた。そこでは数学 (Mathematics) を教えていたから、内容は微分 (Differential calculus) や積分 (Integral calculus) など日本の大学のレベルに相当するものであった。後で聴いた話であるが、特に社会文化系 (Social arts) の学生が極めて初歩から学ぶために「算数演習」等という授業も用意されていると言う。このような用意されたプログラムに参加し、時には向こうの大学の学生との交流会や地方見学、ホームステイ (Home stay) などを交えながらの滞在であったが、やはり人種差別 (Racism) は残っており、便所は「白人 (White)」と「有色人種 (Colored)」の区別があった。われわれ日本人はどちらを使用するのか? という疑問もあったが躊躇なく「白人」の方を普通に、ごく当たり前の様に利用していた。便所には隣の仕切り壁はあるもののドアはなく、用を足している人の顔も見える便所も大学内にはあった。メンバーの一人がトイレに入って座っている状況が丸見えで、外から話しかけるといったことも経験した。筆者は第2次大戦での日本の軍隊の敵兵、捕虜への対応などから、日本人全体が人種差別に対する感覚は殆ど持ち合わせていない、と思っていたから差ほど気にもならなかったし、今でもその気持ちは変わらない。第2次大戦が始まる前に既に世

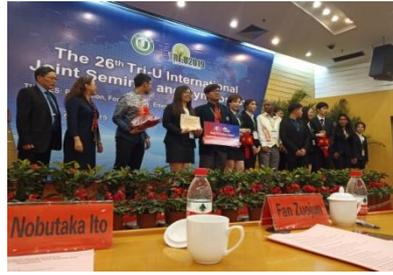
世界の全ての国は欧米の植民地下にあり、独立国として存在したのはたったの2ヶ国で、それがタイ王国とわが日本国であったことは既述した。アフリカで、もう一つ植民地化されなかった国があるが、それは疫病が蔓延し、近づけなかったと聞いている。タイの隣国であるラオス (Laos)、カンボディア (Cambodia)、ベトナム (Vietnam) はフランス (France) が、ミャンマー (Myanmar)、スリランカ (Sri Lanka)、マレーシア (Malaysia)、シンガポール (Singapore)、インド (India)、パキスタン (Pakistan) などは英国 (England)、インドネシア (Indonesia) は350年ほどもオランダ (Netherland) の植民地 (Colony) であった、フィリピン (Philippines) も最初はスペイン (Spain)、ついで米国 (USA)、またその後数年弱は日本 (Japan) により統治された。タイ (Thailand) が独立 (Independence) を保つことができたのは、宗主国間の緩衝地帯 (Buffer zone) として残ったためとも言われる。第2次大戦で日本が降伏した後、アジア (Asia)、アフリカ (Africa) のかつての植民地国の殆どは数年以内に独立した。日本軍が残虐なことをしたとの話もあるが、一方で撃沈した敵艦の乗員を全て救出し、自らの乗組員数の倍にも上る400名程の敵兵の命を救った艦船「雷」の艦長、工藤俊作の敵兵に対する扱いは、美談として語り継がれている。工藤艦長はさらに「ようこそ、わが艦に」と救助した全員を艦上に招き、戦いが済めば人間として振る舞うと言う武士道精神が、相手の兵にも感動を与えたようである。その後、救われた英国人がその時の感謝を述べるために、日本を訪れたが工藤艦長は既に死去しておられ、目的は果たせなかった。彼は家族にもそのことを一切他言しなかったと言うから、真の国士であった。しかし、その振る舞いは敵味方を超えた人間としての作法 (Manner) に基づく「礼儀 (Courtesy)」であるからこそ、感謝され美談として語り継がれていることは間違いない。中には軍規に背き、日本という国を貶める行為をした兵も居るであろうが、大方は国の規則に従い、上記の様な統制の取れた行動をして居たと聴いている。日清、日露戦争に勝利し、大国の仲間入りを果たした日本が、世界に先駆けて提唱したのが「人種差別撤廃、人類皆平等」であったが、座長であった某国の大統領の「全員一致」での評決で無ければ「承認された事にはならない」との結論でこの提案は葬られたが、ではそうした議論があったことを議事録に残せと日本側は迫り、その記録が残っていると言う (上記既述)。人を基本的に平等に扱う、「基本的人権尊重」の姿勢は以前から日本人の心に根付いていると視ることが出来る。「和をもって貴しとなす (Harmony is the greatest of virtues)」とは聖徳太子の十七条の憲法にあるもので、原文は日本書紀にある。人種差別の説明には、必ずしも得たものではないが、肌の色や信条、言語、文化、慣習の違いで差別感を持たず、話合いを持って和する事が大切と理解して居る。1964年の東京オリンピックで表彰台に上がった米国の黒人選手が顔を下に向つむいて、右手の拳を天の方向に向かって突き上げる、一種の「抗議」と思われる姿勢を示した。これは、われわれ黒人は米国で差別を受けていると言う抗議であった。それから半世紀後の今も、米国のあちこちで人種差別への抗議が続いている。情報化時代だけに直ぐに動画がSNSにアップロードされ情報の拡散、共有が成され、広範囲で抗議活動が組織的 (?) に始まる。今回もミネソタ州

(Minnesota) の事件では、外部からも多くの支援者が参加し、夜になると店が放火され、襲撃され、多くの高価な品物が略奪された。ホワイト・ハウス (White House) 近くの教会も放火された。人種差別への抗議と物品の略奪は無関係では有るが、集団となると無責任さが前面に出た行為が激しくなる。しかし今回の事件では、殺された黒人青年の弟が抗議集会に参加した人々に向かって発した言葉は「さすがにアメリカは違う」という強い印象を知らしめた。その殺された黒人の弟という人物は次のように述べた。

「みんなが兄貴のことで抗議に参加してくれて有り難い、感謝する。しかし俺は貴方がた以上に悲しく、またこのようなことが起きたことに抗議し、激怒している。でも抗議デモに参加してくれたことは有り難いが、もっと平和的にやってくれないか。店のガラスを壊したり、放火して押し入り、商品を略奪する行為は抗議デモとは全く異なる次元のものだ。頼むからこのような事はしないでくれ。兄貴もその様な事態を見て悲しんでいると思う」と。

聞くとところによれば、抗議デモには他の州からもいくつかの団体がそれぞれのシンボリックな旗を持って結集し、最初は物静かな行進が夕刻になると暴徒化し、放火、窃盗、略奪が始まった。上記の黒人の弟と称する人物のスピーチ (Speech) はこのような行動に対する忠告、あるいは警告、さらには要請でもあった。首都ワシントンではキリスト教の教会が放火された。一般にキリスト教信者が多いアメリカでは教会を焼くなどと言う行為は殆ど無いというのが常識、あるいは通念である。しかし教会が放火され、火事になったことは事実である。どこか別の異なる意図を持つ団体が行った暴挙ではないかとも言われている。数日後外国人留学生の一人が、店からの略奪品である有名ブランド商品を SNS にアップロード (Upload) し、多くの人が驚いたと言う。同じ世界に住む人間でも、その人間としての品格には余りにも大きな差があることを再認識し、驚愕した人も少ないのでは無かろうか。米国大統領は、放火、窃盗、略奪を行った団体を、正当な抗議デモ隊ではなく、単なる暴徒の集まりとの見方を示し、州兵の出動を州知事に要請した。長年、アメリカ社会で見下され、虐げられてきた黒人の一人が放った一言は、まさに「アメリカの心」そのものにも思えた。兄が殺された事は、確かに悲しいことではあるが、集まったデモ参加者に「血迷うな」との「正論」を言う姿勢が強い印象を与え、「さすがアメリカだ」と多くの人を感じたに違いない。動画ではこのスピーチに同意、理解し、拍手する参加者も見られた。筆者はこのとき、自分が訪米後の半世紀で「アメリカは変わった」との強い印象が感動を呼び起こした。今でこそ国際化 (Internationalization) が強調され、海外の大学との間でいくつかの国際交流事業が進んでいるが、学生の教育研究を軸とした事業が多いのも周知である。しかし、筆者が口を酸っぱくして強調したいのは、そうしたプログラムが単に「学術研究論文の発表」の場というのではなく、国際的常識 (International common sense)、マナー (Manner and Etiquette)、礼儀 (Courtesy) を学ぶ事の重要性を忘れてはならないと言う事である。それが「和をもって、尊しとなす」事につながると考えて居る。一つの事件を利用しての泥棒行為は、正当な抗議行動ではなく。暴動を起こす「暴徒、暴力集団」と

いう見方も成り立つ。表面のみを見ていると中身が見えなくなる。この事件で、その後に警察側が取った行為も賞賛されている。すなわち警官隊が片足を膝付いて、自分たちにデモ隊を無理に強制排除する意志がない事を示した事である。暴徒は鎮圧するが、正当な抗議デモを鎮圧する意志がないことを示したからである。このような高度な判断に基づくマナー (Manner)、挙動 (Behavior)、姿勢 (Attitude) が不必要な暴動の発生を回避、抑制し、市民や国民一人一人の民度を高め、自国のみならず他国にも大きな教育、文化的影響を与え、人間としての生き方、有るべき姿、高貴な振る舞いを具備させるのである。学生、若手研究者の将来に向けた人材開発と育成は単なる学術論文の発表の場としてではなく、人としての具備すべき条件を備えた、深い調和の取れた人材の育成であることをあらためて再認識すべきである。人を陥れたり、だましたり、隙あらばずるがしこく、人の目をかいくぐり、自己の利益誘導を図る人間を社会に出す教育はしては成らない。博士号の学位授与も単に学術的に優れているということだけではなく、人間としての経験、キャリア、常識、マナー、エチケットを備えているからこそ、学位保有者としてふさわしいのであり、単に知識量のみが多いただけでは意味を成さない。幸か不幸か、今回のコロナ禍騒動は、世界で大量の感染者と死者を出したが、いろいろな事を学ぶ機会にもなった。特に国際間での相互認識、特にその差を、再認識させるに足る状況を新たに浮き彫りにもした。国際的に協調できる国とできない国、あるいは協調したくない国など、これまで分からなかった国を再認識する絶好の機会にもなった。国際協調がグローバル社会の重要な一つのキーワード (Keyword) になって久しいが、その意味を理解せず、国際法をも無視する国があることは悲しい限りである。差こそあれ、こうした認識は国のレベルにとどまらず、いくつかの集合体、社会組織でも、今でも生きており、ややもすると「金銭」を最優先した経済概念が国際間の相互友好、相互理解の推進を阻んでいる。大学がオプファーする学生、若手研究者を対象としての将来に向けた価値ある人材 (Human capital) として開発、育成する国際交流事業における国際化、グローバル化 (Globalization) の意味を再度見直す必要性を強調したい。それには精確な事実確認と、迅速な情報の開示と共有、各種媒体による頻繁なコミュニケーション、それも一方通行 (One way) ではなく、相互通行 (Interactive) でなければならない。警官の黒人逮捕における殺人行為を表面的に見るだけでは、正しい対応はおろか、間違った対応すら招きかねない。火事場泥棒が如き行為は、周囲の目がなくとも「しない」と言う常識が基本的に、また原則的に具備すべき人間としての「当たり前の良心」であり、行き過ぎた警察の行動に対する純粋な抗議活動から外れて、放火、窃盗、略奪を、その機に乗じて行うことは人間としての「良心の存在」を疑わせる行為である。「見間違えるな、アメリカは、貴方がたとは違うんだ」という誇りと自信に満ちた主張を堂々と言える個人の発言から、真の「アメリカのすばらしさ」を強く感じた。同時に大学の国際交流事業に対するあり方を見直すべきと強く感じている。



3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムで、壇上に並ぶ参加大学の代表



国際セミナー・シンポのフェアウェル・パーティーでの参加学生によるアトラクション